

コメント

森岡清美*

かねてから家族人口学の注目すべき研究を続々と発表して、われわれ家族社会学者に有益な知見と資料を提供してこられた人口問題研究所が、機関誌『人口問題研究』200号を記念して掲出のテーマでシンポジウムを開催され、現代の結婚と家族の動向ならびにその要因に肉薄する興味深い報告をもって、私たち参会者に学術的な満腹感を味わせてくださったことに、まず感謝と敬意を表したい。

さて、このシンポジウムを構成する4本の報告に通底する基本的な発想は、結婚と世帯形成の今日の動向を計測的な方法で解明し、かつ可能な限り将来予測を試みるということである。これは人口問題研究所としては当然のことであろう。しかし、従来この課題に素朴な形でしか答えられなかった家族社会学者にとっては、すこぶる意義あることとしてまず銘記されるのである。

つぎに、今回の報告に見られる注目すべき考え方は何であろうか。見る人によりそれは異なりうると思うが、私は私自身の関心にひきつけて、結婚を人々のライフコース上の重要な出来事 event ととらえる観点、と理解しておきたい。この観点に立てば、結婚という出来事はその人の先行する出来事（たとえば学卒・就職）および環境（たとえば住所・職種・職場）によって規定され、後続の出来事（たとえば親との同居別居・出産・就業継続・退職）を規定するとともに、その予想によっても規定される、ということになる。

第1報告は、初婚を初婚過程なる名称のもとに、配偶者選択 mate selection の過程を含めて、一つの出来事としてでなく、いわば a series of successive events ととらえている。人口学からの、おそらく日本最初の配偶者選択過程の研究というべき、第9次出産力調査の第1報告書第3章を発展させたものである。

日本の家族社会学では20年近く前から配偶者選択の研究が始まり、出会い(知合い)、婚約、結婚の時点を経婚形態(見合い・恋愛)別に調査しているが、この方面の研究を推進させた望月嵩氏は、アメリカの研究を参照して、これに私的・了解 private understanding (交際している二人の間で相互に結婚相手として認めあうこと)の時点を加えた。私的・了解は見合い結婚でも恋愛結婚でも出会いと婚約の間に介在するものであるが、この時点が男女の間で大きく喰いちがうという興味深い観察を報告している。

金子氏の研究では、結婚可能な状態への到達年齢、あるいは結婚市場 [過程] 参入年齢という標題で、個人が結婚を現実のものとして意識した年齢(ただし妻のみ)を問うているのが、注目される。これは望月氏の私的・了解と一見似ているようで、その実全く異なるものである。そして、結婚を意識した時点と知合いの時点の前後関係に、結婚形態により大きな差異がある。私はこの点に注目して意見を述べたが、金子氏の関心とはすれ違ったようである。

第3報告は未婚女性に注目してライフコースとの関連で結婚志向・独身志向、および年齢志向・相手志向を考察し、第2報告は結婚と世代間関係にかんする規範意識の主成分を統計的に明らかにするとともに、それによって規範意識の変動方向を暗示し、第4報告は親と成人子の同別居の動向を子細に分析して、それぞれの視点から、結婚の意思決定およびその timing を規定する要因に迫り、多くの新しい知見を開示してくださった。とくに第4報告は、かねて家族社会学者が強い関心をもっていた問題を取り上げ、信頼すべき精密な資料を提供してくださったことを高く評価するものである。

今度の報告を含めて近年の家族人口学的研究には、家族社会学者が記述的に明らかにしたところを計測的に解明し、かつ将来予測にも及ぶという水準以上の展開もあるように思われる。わが地盤の揺らぐ思いがしたのは私一人ではあるまい。

* 成城大学文芸学部教授